

論文要約

中世フランス語版セネカ『ルキリウス宛倫理書簡集』のテキスト校訂

宮下拓也

本博士論文は、中世フランス語版セネカ『ルキリウス宛倫理書簡集』（以降フランス語版『書簡集』と略記）の批判校訂版である。各書簡の要約のリスト、プロローグ、第1書簡から第65書簡までのテキストが示される。この古代ローマ帝国の哲学者による古典ラテン語テキストの、中世のフランス語への翻訳は、14世紀初頭にアンジュー朝ナポリ王国において作られたものであり、前ルネサンス期における古典古代の作品の受容・翻訳の歴史という文脈において、またイタリアにおけるフランス語使用という文脈において、さらにいわゆる古フランス語と中期フランス語の過渡期という時代性から、文学史・フランス語史の双方において重要な意味を持つものである。しかしながら、今日に至るまで本作品の全体をカバーする校訂版が試みられることはなく、研究も断片的なものが行われるにとどまってきた。本博士論文はフランス語版『書簡集』の全体的な研究に扉を開くものとなるはずである。

まず、「はじめに」でフランス語版『書簡集』の批判校訂を行うことの意義を確認する。一般に、翻訳は「原典」に劣るものと見なされがちで、中世の翻訳についても「オリジナル」の作品に比べて研究は数も少なめであったが、近年は盛んになっており、古典作品のフランス語翻訳の初期のものとして、フランス語版『書簡集』は着目されている。中世イタリアにおけるフランス語使用も、近代文献学の黎明期から研究されてきた分野ではあるが、近年になって総合的な研究を行う機運が高まっている。フランス語版『書簡集』はイタリア語の影響が見られることは指摘されているが、長らく研究が停滞している。フランス語史の面からは、「地域性」という観点に関心を集めており、このフランス語版『書簡集』も、イタリアに生まれたフランス語圏という特異な言語圏に属すものとして言及されている。このように複数の観点から、フランス語版『書簡集』は研究する価値があるとされているものの、あまり研究が行われていない理由として、校訂版が存在しないことが影響していると考えられる。それゆえに、校訂版を作成することは今後の研究の基盤になるはずである。

その次に、第1章で中世におけるセネカの受容を概略する。セネカは、中世を通じて最も読まれた古代の著述家の1人であり、『聖パウロとの往復書簡』などの偽書、また抄本・アンソロジーを含めて膨大に写本や記録がある。その中でも最も読まれたのが『倫理書簡集』であった。12・13世紀になってラテン語でなく俗語への翻訳が少しずつ始まるが、全訳が行われた初めてのものが14世紀初頭のフランス語への『倫理書簡集』の翻訳である。このフランス語訳は、さらにイタリア語・カタルーニャ語・カスティーリ

ャ語への翻訳の元にもなっている。『書簡集』以外の作品についても 15 世紀までに、悲劇作品も含めて、翻訳、また出版の対象となった。

それから第 2 章で、中世イタリアにおけるフランス語使用という文脈から、フランス語版『書簡集』の位置付けを述べる。フランコ・イタリアン文学一般について、その発展に関して唱えられている論の概略を示した後、南イタリア（特にアンジュー朝ナポリ王国）におけるフランス語使用にフォーカスし、アンジュー朝のナポリ王と十字軍の繋がりから、十字軍国家におけるフランス語についても述べる。南イタリアで作られたフランス語テキストとしては、古典古代の作品や歴史書の翻訳、公文書で使われたフランス語など、ある程度の量のコーパスが現存している。また、ナポリ王国において作られた写本にも南イタリアの言語の特徴が見られるものがある。ナポリ王国のフランス語には、シャルル・ダンジューの出身地であった北フランス方言、南イタリア方言、混成言語であった十字軍国家のフランス語の要素が見られ、フランス語版『書簡集』もそのような言語環境で作られたものであった。

続く第 3 章が、フランス語版『書簡集』を対象にした記述を行う、本論文の中心的な章である。ここではフランス語版『書簡集』の現存する 5 写本の記述を行い、ラテン語写本との関係を整理した後に、フランス語への翻訳をスタートとする諸ロマンス語訳の略史を確認し、それからフランス語版『書簡集』の詳細な分析に移る。フランス語の 5 写本の相互関係を考察し、底本写本を選択し、既存のエディションを確認した上で、本博士論文における校訂の方針が説明される。最後にフランス語版『書簡集』におけるフランス語について、音韻論、形態・統語論、イタリアニズム、翻訳の方法に関して、特徴を記述する。

『書簡集』のフランス語訳が作られたほぼ直後に、このフランス語訳をもとにイタリア語訳が作られ、このイタリア語訳は多数の写本が伝わっており改訳も行われたことなどから、かなりの流通を見たと考えられる。15 世紀前半にはイタリア語訳をもとにカステイーリャ語の翻訳が作られ、印刷出版され、版を重ねており、多くの読者を得ていた。カタルーニャ語訳はフランス語版をもとにしたもので、1390 年から 1410 年の間に作られたとされる。これも複数の写本が現存し、広く流通したようである。ラテン語写本はそもそも前半と後半に分かれて伝承されており、前半は α と γ の 2 系統、後半は B、 ϕ 、p の 3 系統に大別され、12 世紀以降の写本は多くが γ と ϕ の系統に位置付けられる。フランス語版『書簡集』の元になったラテン語写本も、現在校訂テキストとして流通しているものとは異なる系統のテキストであった可能性が高いことを確認する。一方、フランス語写本はフランス国立図書館の fr. 12235 と nouvelle acquisition fr. 20545、大英図書館の additional 15434、ベルギー王立図書館の 10546 と 9091 があり、共通誤記などから fr. 12235 と additional 15434 が 1 つのグループ、残りの 3 点がもう 1 つのグループを構成

し、このグループはさらに2つの下位グループに分かれると推測される。イタリアで作られたとされる始めのグループから、既存の校訂が底本としなかった大英図書館 additional 15434 写本を本論文の校訂の底本とする。基本的には、短縮形、句読点や大文字・小文字の区別などを近代のフランス語の書記法に合わせるほかは、写本に書かれているものを再現し、写本ごとの、単なる綴りの違いを除く、すべての異読を示す。

フランス語版『書簡集』のフランス語は、ピカルディー方言の形が散見するものの、形態的なイタリアニズムはなく、基本的には「スタンダード」なフランス語と評価できる。統語と語彙においてイタリア語の影響が確認できるが、その割合は低い。フランス語版『書簡集』は、正確な翻訳とみなせるものであり、使われている翻訳手法は他の中世の翻訳と共通のものである。

このあとに校訂テキストと注、語彙集・固有名詞索引が続く。テキストの異読は、巻末ではなく脚注の形で示し、巻末注においては、テキストに修正を施した箇所の説明や、ラテン語原典・他の言語のバージョンとの異同、注目すべき語法、問題のある箇所についての議論がなされる。語彙集・固有名詞索引は一部の単語を除いてテキスト中に現れるすべての単語・形態が収録されている。

テキスト校訂を通して直接的に得られた成果は主に語彙に関するものであり、松村剛『中世フランス語辞典』を導きの糸としながら、ヴァルター・フォン・ヴァルトブルクの『フランス語語源辞典』、ATILF による『中期フランス語辞典』、フレデリック・ゴドフロワの『古フランス語辞典』などの既存の権威とされている辞書の不備を指摘した。これまでは14世紀後半から15世紀がフランス語で初出と考えられていた単語の、それよりも古い中世フランス語版『書簡集』における用例が多く見つかる。また、南イタリアで作られたこの翻訳の特徴と言えるイタリア語的な表現があり、さらにラテン語からの翻訳であることに関わる通常のフランス語テキストとは違う意味での単語の使い方などが、当テキストには確認できる。これらについても巻末の注において言及されている。